慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	E・F・フレージャー アメリカに於ける黒人家族
Sub Title	E.F. Frazier; The negro family in United States. Dryden Press, New York, 1951
Author	飯島, 瑞子
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.11 (1951. 11) ,p.693(67)- 696(70)
JaLC DOI	10.14991/001.19511101-0067
Abstract	
Notes	紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19511101-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

るナショナリズムの發生がその獨立と平行して敍述されている。アメリカ・ナショナリズムの特徴は、ドイツやロシヤのように暗い過去の深みから叫ばれたものではなく、顔を未來に向けた、明るい現在から誇らしく生れたことである。それは言語の上にも、いかなる外部的な象徴の上にも基礎はなく、一つの理念、世界主義的理念によつて統一されている。

第七章「舊世界における搖動——過去の傳說」中東歐のような、西歐に比べて社會的政治的後進地ではナショナリズムは先ず文化的表現をとつた。文藝復興も宗教改革もここでは社會的政治的秩序を變革せず、純粹に學問的神學的であり、その影響は知識階級の中に止まつた。西歐ナショナリズムは何か人爲的であり、政治家と政治運動の創造物であるようにみえる。他方ドイツ・ナショナリズムは自然そのものから生れた自生的な、過去の深みより發し、世界主義的且つ合理的原理ではなくて個人的且つ固有の民族資質に根ざしているのである。クロプシュトック、メーザー、ヘルダー等の文化的ナショナリストは、庶民のナショナリズムとは無緣であつた。

第八章「舊世界における搖動——大きな覺醒へ」十八世紀、ヨーロッパ社會の新しい基礎の探究は自由、人間性、愛國主義の三つの概念を廻つてであつた。この特に政府と人民との間の新しい關係、即ちナショナリズムの問題が、イングランド、ウエールズ、アイルランド、低地地方、スペイン、ポルトガル、イタリー、北歐諸國、バルカン諸國、南スラヴ諸國に亙つて述べられている。十八世紀末に全ヨーロッパは深い危機、再生、よりよい社會生活の基礎、公私の道德の新概念の探究を經驗した。この危機は先ず大ブリテンとアメリカにおいてイギリス民族により解決された。ヨーロッパ大陸では西歐が東歐に先んじた。フランス革命は全大陸にとつての轉向點であつた。革命とナポレオンによつてヨーロッパは十八世紀の危機によつて準備された再生、新時代、著者のいうナショナリズムの時代に入つたのである。

＊　＊　＊

このように十九世紀ナショナリズム時代に至る迄のその前史を辿る時、そこに示唆されるのは次のようなことであろう。第一にナショナリズムと近代國家の成立、第三階級の勃興との關係、換言すれば政治的には民主主義、經濟的には資本主義（コーンの言葉を用いれば産業主義）との關係である。第二にはナショナリズムの二つの型の問題、それは西歐型と東歐型と呼んでもいいし、比較經濟史家の用語に照應してアメリカ型とプロシヤ型と呼ばれてもいい。前者は社會的政治的表現をとり、後者は文化的表現をとる。第三にはナショナリズムと世界主義（ユニバーサリズム）との關係。世界主義、人道主義の契機を含まないナショナリズムは西歐的なナショナリズムに發展することはできない。以上三つの問題は相互に關連している。そしてコーン教授はマックス・ヴェーバーと同じく外面的には價値判斷は避けているが、先の用語に從えば世界主義の契機を含む西歐型ナショナリズムを眞のナショナリズムとしている。

ヴェーバーは東洋には資本主義は自らの中より生じ得ないとした。從つて彼の經濟史は必然的に西歐史となつた。コーンは恐らく日本人はユダヤ人、ギリシャ人と同じような選民であるという感情をもつていた。それにも拘らずその王朝の地位は日本人の態度をヘブライとギリシャの民族感情から鋭く異ならしめた、その故に勿論、日本は近代ナショナリズムの形成において何の重要性ももたない。しかしこの日本人の態度は、日本人が近代ナショナリズムを採り入れるのに成功した、ユダヤ・ギリシャ傳統の外部の最初の民族であつたという事實を說明するかもしれないのである。こうしてみるとコーンにとつてもナショナリズムの歷史は、ヴェーバーと同じく西歐史となるのではないだろうか。

ともあれ、今日世界の視聽を集めている東南アジアのナショナリズム攻究に際してもこの書は資するところ極めて多く、益するところ極めて廣いと思われる。（一九五一年九月）

E・F・フレージャー「アメリカに於ける黑人家族」

飯島瑞子

E・F・フレージャー
「アメリカに於ける黑人家族」
(E. F. Frazier; The Negro Family in the United States. Dryden Press, New York, 1951)

本書は一九三九年にシカゴ大學の社會學シリーズの中の專攻論文として初出版されたが各所からの要求により一九五一年に改訂短縮、再出版された。

著者はアメリカ黑人であり、ハーワード及びクラーク大學に勉學後、シカゴ大學で PH. D. を受け一九四八年に American Sociological Society の會長に任命され、一九四九年には UNESCO に屬する民族關係の研究の爲の委員會の會長を命ぜられた。現在ハーワード大學社會學教授である。

本書の外次の三著がある。

"The Negro in the United States"
"The Free Negro Family"
"Negro Youth at the Crossway"

一應アメリカ黑人家族を主題として書かれてはいるが、人間關係における自然的結合の形成及び急激な社會の變化に應ずる社會制度としての家族構造の形成が、この研究の根本問題であ

る。

しかし「新世界への勞働力供給の意味で十七世紀より南北戰爭まで繁榮した奴隷制は、今日のアメリカにまで祟つた。」（序說）と、指摘されている。そこでアメリカの總人口約一億五千萬人の內、約十パーセントを占める黑人の比率上の增殖は見られないにしても、この民族問題が、社會的、政治的、經濟的見地から、アメリカの一つの惱みとしてのこされて居ることは自明であろう。かくて本書は社會學的には勿論大きい意義を持つが、これを經濟的な觀點から見ても、黑人のその樣な社會構造的編成は、明確に其の時期のアメリカ經濟を反映するものと解される。そして他のアメリカ移民と共通點を持ち乍ら、黑人固有な相異點もある事を考えるならば、南部の經濟事情と民族の差別とを切離して彼等の問題を研究する事は不可能である。この意味で本書は經濟學的見地からも興味あるものと思われる。

著者が社會學的見地から揭げていう項目を中心に、內容を大きく四つに分ければ、次の如く概括できる。第一は奴隷制下におかれた南部農業の一要因としての黑人。第二は南北戰爭に續く奴隷解放とアメリカ工業の發達。第三には第一次第二次大戰中の勞働力不足の影響。第四には今後の見透しである。

奴隷制下におかれた黑人は南部の商品化された勞働力であり、その運命は全く主人の意志によりきめられてゐた。從事する仕事に應じ奴隷內の階層が設けられ、消費物資はすべて頭割、階層割で配給制になつていた。アフリカの傳統を携えて本國のプライドを次のジェネレーションに傳える者の數は減少し、奴隷の生活樣式、宗教、道德等は全く與えられた新しい環境に自ずから卽應していつた。この經濟狀態下におかれた黑人家族の中心となつたのは三つの意味からして女性であつた。一つには男性は勞働力のみであつたが、女性は勞働力のみならず繁殖機關として大事にされた。又主人のミストレスとして奴隷內の地位を高める事が出來た。第三には幼兒養育の立場から自然と親子の關係は父親よりも母親の方が强くなり、前に述べたいずれかの理由から發した特權と共に、必然的に女性が家族の中心とならざるを得なかつた。しかし家族の構造自體はルースなものであつた。交際、結婚、離婚の自由も束縛されていた黑人にとつて結婚は性的アトラクションから發するものが自然と多かつた。ある場合には共通の悲慘な運命が原因となつて家族に對する强い愛情が發生する事もあつたが、一般には必然的に家族のつながりはルースなものであつた。夫が賣られれば妻は次の男と結婚し、多夫の間に出來た何人かの子供と共に暮す例が多かつた。又母親が賣られた場合、他の女性が簡單に殘された子供の母親となつてやる事も少くはなかつた。故に個々の家族關係の性格、永續性の相當程度まで主人の支配下にあつたと云つてよい。

奴隷制廢止後の家族はどうなつたかと云うと、解放と同時に

結婚、職業選擇、移動の自由は勿論許されたが、依然として當分の間は家族の中心は女性であつて、普通考えられる樣に母權は父權に移行しなかつた。これには二つの理由が考えられる。一つは奴隷制下における結婚制度に基く結果であり、又習慣でもあつた。二つには解放後の黑人一般の貧窮狀態であつた。もともと家族が生き別れになつて夫、又は妻を持ち乍らも再婚、三婚、四婚とかさねての結婚はざらにあつたし、又自由を許された當時、自由に飢えていたあまりに家族を捨てて放浪生活に入つてしまつた男子は決して少くなかつた。これに對し子供を持つた女性は家族に對する執着心が强かつた。經濟的には奴隷制下におかれた時より困難が增大した。資本主義的發展に伴つて生じてきた惡によつて左右され、封建的奴隷化を資本主義的奴隷化に置きかへて行つたに過ぎなかつた。南部も工業化されて行つたが、工業に吸收されるであろうと思われた黑人は農村より工場への動きから除外された。それは白人の貧農はより高い生活水準をもとめて都市へと移動して行つたが、黑人の勞働力をも使用する程まで南部は工業化されなかつたせいである。又黑人には農業以外にあまり經驗もなかつたことも手傳つた。

大都市へ流れ込んだ黑人は白人との生存競爭に負けて一家は崩壞してゆく傾向が强かつた。又製材所へ入込んだ者は一應は固定した家族形態を編成するであろうと見られたが、放浪の團體として終つてしまつた。農村へ殘されたものも亦、經濟的に普通の家族形態を形成し得なかつた。貧弱な土地を與えられて原始的な生產方法で農業に從事した者は猫の手でも借りたい程の勞働力不足に惱まされた。そこで、男女の交際は廣く自由に行われたが、結婚には必ずしも至らなかつた。親の方は娘をはなしたがらなかつた上、女性の方も働き手でない男とは交際はしても結婚をきらつた。結果として私生兒が一家に二三代續く事はざらに見られ、一軒に二三家族住込む例も澤山あつた。云うまでもなくこれが總べてを代表したものではない。半面、黑人としてのプライドを持ち續けて白人の生活樣式にしたがい、一家を固めていつた者も澤山あつた。したがつてここで黑人は二つの階層に分裂したと見られる。卽ち幾分でも私有財產を持つたものと、あとは貧民であつた。

ここで面白いのは Frazier が指摘する解放後の黑人の自からもうけた社會的分裂である。卽ちこの分裂は大體四つに分けられる。一つは南北戰爭と後に自由となつた者の間に差が設けられていた。二つには宗教から發した相異。第三にはその住む地域。第四には血統。最後の血統に基く社會的分裂は純アフリカ系統であるか、又は混血でもインデアン系、スラブ系、ラテン系等色々な組合せで分かれていたが、現在では brown か black かで大體分けられて居る。

第一次大戰から第二次大戰にかけての間に本當の Negro migration と云うものが始まつた。（これ以前の放浪の形を取

つた移動は除外される。）というのは今迄の北部の勞働力の供給はヨーロッパからの移民で充分であつたが、戰時生産の爲、白人は高賃銀を支拂う工業の方へとられ、サーヴィス業に關する職業があき、そこへ黑人が入込んだのであつた。黑人が工業へ吸收される樣になつたのは第二次大戰中であつて、それ以前のものは少かつた。あくまでも人の下積となつている黑人は、白人と同等には生存競爭に堪えられないため、南部から一家を引きつれて北部へ移動してくるにしても經濟的に敗北し、一家は崩壞せざるを得ない事が多かつた。というのは歇、小說に描かれる程一家の主人が生活に追われその貧窮から逃げるため、失踪してしまうのであつた。

Frazier はこの事を father on leave と云つている。そしてこの時期からニューヨークのハーレム、シカゴ、ピッツバーグの黑人街の歷史が作られていつたのであつた。前に述べた二階層が變形し、職業別の分裂が生じた。しかし黑人の中產階級なるものが發生したのは第二次大戰の影響が强かつた。勿論これと同時に brown middle class に對し、black proletariate が發生した。

家族の固定化、編成等は黑人の經濟狀態に直接反映し、この點から見て母權が父權に移行して行く過程も第二次大戰による所が大きいといえよう。

黑人の歷史はいまだ九十年たらずのものであり、前述の如く他の移民とはアメリカに於て異つた發展過程を持つているが、同じ人間社會構造のパタンにそつて進步をしながらも、刺戟に對する感受性が强かつたと見られる。Frazier のいう今後の黑人の發展、とくにアメリカの白人種との融合については、次の五つがあげられる。即ち一つには、南部の農村經濟事情が現在の如く續くものであれば、黑人の農村から都市へ、南部から北部への移動はさけ得ない。二つには大都市へ流れ込む黑人は依然として貧民層を形成し、貧困に襲われて家族は崩壞せざるを得ない。三つには過去の移動と異る點は、人種的差別のラインも大きいが、職業的差別のラインがより强くなり、白人と肩を並べてプロレタリアート層を形成してゆくであろう。四つには、これから益々黑人の孤立的な社會は崩壞し、それに伴つて家族の編成も亦變るであろう。そこでアリカの白人種との融合の度合は、今後は雜婚よりもむしろアメリカ經濟の動向により決定せられ、黑人がその構造內部にどの程度參加するかによつて定められて行くであろう。即ち Frazier は民族差別問題の重要性、及びこの問題の解決、そして最後に黑人家族の形態を今後のアメリカ經濟いかんによるものであるといわんとしている。

かくて本書は獨り社會學的觀點からのみならず、經濟的見地から見て、黑人問題がアメリカ經濟にとつて占める意義を理解する上に役立つ文獻といつて差支えないであろう。

論文紹介

W・ホフマン

『英國に於ける工業生產の發展——量的研究——』

（W. Hoffmann, "The Growth of Industrial Production in Great Britain: A Quantitative Study." Economic History Review. 2nd Series, vol. 2 No. 2 1949, pp. 162—180）

本稿は英國工業生產高の變化の量的分析に對する一試論である。物量的生產のみを取扱い、生產高の價値や生產費の指數を作成しようとするものではない。然し物量的な生產額の數字も常に得られるとは限らない。從つて本稿においては十八世紀では總生產額の約五〇%、十九世紀及び二十世紀では七〇—八〇%に當るものを採り上げ得るにとどまる。扨て一七〇〇—一九三五年の總工業生產高指數によれば、英國工業の發展は繼續的であつて大きな停滯乃至減退の狀態はない。この期間は發展率の相違によつて三段階に分たれる。即ち一七〇〇—八〇年は〇・九、一七八一—一九一三年は二・八、一九二三—三五年は一・九の發展率を示しており、これを初期工業化の時期、發展しつつある資本主義の時期、最近の發展緩慢化の時期と呼ぶことが出來る。實質國民所得の發展率は一八八〇年代及び九〇年代には增大したが、一九〇〇年以降は減退しておりこの變化は恐らく永續的なものであろう。

次に異つた工業群の發展率の相違に就て見れば、工業化の過程に於て資本財の生產高は消費財のそれよりも急速に增大する。一八一九——一九一三年の夫々の發展率は二・五及び一・六である。かくて消費財生產の或る增加率は生產財の一層急速な增大率によつて伴われる事が量的に確認される。また或る工業の輸出可能性は發展率を增大する。その適例は木綿工業である。綿糸綿布共に消費財全體の發展率よりも高い率を示した。この逆の例は製粉業であつて、完全に國內市場に依存するため平均以下の發展率を示している。

一八八〇年以降消費財の輸出割合は漸減したが、生產財は現在迄上昇し續けている。輸出が殆んどないにも拘らず國內市場に於ける需要の增大に基いて、平均以上の發展率を持つ工業がある。かかる工業には、實質所得の增大につれて一人當りの消費高が增大する工業（糖菓、紙、印刷等）と、古い工業に代つて自らの市場を創出する新工業であるために異常な發展率を示す工業（アルミニウム、ゴム、人絹、電氣用品、自動車等）とがある。尙若干の例では、發展率の相違は輸入品との競爭に基く。或工業（絹、錫、亜鉛）は海外からの强い競爭に直面して生產高が絕對的に減少したが、他の工業（染料）では國家の保護或は補助金により急激な發展率を示した。

工業の發展には、高い又は增大しつつある發展率を示す場